

令和元年度和歌山県総合教育会議 議事録

- 1 開催日時 令和元年11月27日（水）午後1時30分から午後3時30分まで
- 2 開催場所 県庁北別館4階 第1委員会室
- 3 出席者 知 事 仁 坂 吉 伸
教育長 宮 崎 泉
教育委員 竹 山 早 穂
教育委員 沼 井 健 次
教育委員 関 守 研 吾
教育委員 森 田 知 世 子
教育委員 田 中 和 子
教育企画監 清 水 博 行
企画部長 田 嶋 久 嗣
環境生活部長 田 中 一 寿

4 議 題 本県の高校教育について

5 議事内容

事務局 　　ただいまから、令和元年度和歌山県総合教育会議を開催いたします。開会にあたりまして、仁坂知事から御挨拶申し上げます。

知事 　　和歌山県総合教育会議をこれから開催させていただきます。今日は、教育長から本県の高校教育、15年後を想定した県立高校のあり方についての考えを聞き、その後、みんなで議論をしたいと思います。

事務局 　　本日御出席の方々につきましてはお手元の出席者名簿に記載しています。それでは、会議に入らせていただきます。会議の進行は仁坂知事にお願いいたします。

知事 　　まずは、教育長からお話ください。

教育長 　　今年度当初の新政策の会議で、教育で一番問題となっていくことは何かと議論しました。人口減による影響がますます大きくなっていて、特に高校に関しては、ここ10数年は主にクラス数を減じることだけで対応してきましたが、これから、いくつかの高校を再編及び整備していかなければ立ちゆかないだろうという方向性に至りました。本日は、高校の再編・整備の問題を本格的に取

り上げて、皆さん方と議論をしたいと考えています。

資料2にありますように、今の中学校3年生の8,000人超が、15年後には今の3割減となり、5,000人台になるという実態があります。15年後には、いくつかの高校が存続を危ぶまれる状況になる中、各高校の在り方をこれから考えないといけなくなります。

そこで、いろいろな方の御意見を伺おうということで、この秋に「きのくに教育審議会」を立ち上げました。第1回の審議会で配布した資料が資料1でございます。資料1の(1)から(5)は、これからの高校のあり方を考える上での観点となる考え方として挙げさせていただいています。

今日の総合教育会議で、どういった高校、高校教育が10数年のスパーンで必要かについて、いろいろな御意見を聞かせていただきたく思っています。

知事

もう少し具体的に教育長の考えを話してください。

教育長

それでは、資料1の(1)から(5)までを、説明をさせていただきます。

(1)は、生徒の優れた能力を十分に発揮できる高校を作っていきたいということです。学力や体力を伸ばすことが大事ことですが、一生懸命勉強したい、高い学力を獲得したいと考える生徒の思いに応えるにはどうすればいいか、また、国体やインターハイで優勝できる選手をどのように伸ばしてあげたらいいのかということが(1)でございます。

(2)の個に応じた学びというのは、いわゆる特別な支援を要する子供や不登校経験者、様々な悩みを抱えた子供等が、誇りをもって勉強できるような学校環境を、どうしていけばいいのかということでございます。

(3)につきましては、地域ごとに、学びたいことや活動したいことができることが大事です。例えば、和歌山市では様々な分野の学校に行けます。どの地域でも、そのような思いが叶えられる学校が必要ではないかと思えます。例えば、田辺地域では、工業の勉強をしたいと思う子は工業高校へ行くことができます。新宮地域でも、そういった夢が叶えられるようにするためにはどうしたらいいかを考えていくことが(3)の中身です。

(4)におきましては、普通科や工業科、商業科、総合学科等を、これからどうしていけばいいのかということです。実際は、細かい学科が結構多くありますが、その部分も考えていただきたいと思っています。

最後に(5)の中学校、高校の接続の在り方については、今、中学校から円滑かつ効果的な接続が難しい状況になっています。中学校と高校の接続について、どのような課題があるかを出し、課題を解消していきたいというのが、(5)の中身です。

高校教育を良いものにしていきたいとは思っていますが、学校の数を減らさなければならないという状況も否めないと思っています。ただ、あまり小規模な学校では出来ることも限られてきます。確実に人数が減っていくなか、6クラス、それ以上の学校に整備していきたいと思っています。

しかし、全ての高校が6クラス以上でなければいけないという、地域ごとにそれなりの特徴をもった個に応じた学びができる、小規模な学校も必要であると考えています。例えば、和歌山市はこのくらいの人数だから、普通校はこのくらいの学校が必要だという数の面と、和歌山市では特別支援学校がこれだけあるから、数が足りているかもしれませんが、不登校経験者の子供たちを救える学校はいくつあるんだろう、どれだけのニーズがあるんだろうということなどを把握し、その上で必要な学校を配置出来たらと考えています。

今ある学校の数を減らすことは絶対ではありませんが、やはり15年後を考えるといくつかの学校を減らしていくのが妥当なのではないかと思っています。

紀南地方では、もっと顕著になってきてまして、例えば、串本古座高校は1学年3クラスしかありません。そこで、串本古座高校をどこかの学校と合併するのかと考えますと、それは多分、地域的な問題ではできないだろうと考えています。しかし、今後2クラスになった時に、どのような学校にしていくのかは、議論をしていきたい部分でもあります。

知事

もっと露骨に具体的な話をしてしまった方がいいのではないのでしょうか。教育委員会が考えてるのはこの(1)から(5)までということですが、それ以外の議論を封じてはいけません。ばらばらに言うややこしいので、(1)から(5)について協議してから、(6)としてその他を追加して議論しましょう。

(1)についてまず議論をしましょう。教育長が全て答えていただいてもいいですし、他の誰かに答えていただいてもかまいません。

教育長

清水教育企画監から話をします。

清水
教育企画監

和歌山県では、非常に優れた潜在能力をもっている子供が沢山いると思いますが、残念ながら現状の県内の教育で、十分にその力が発揮できていない面もあります。例えば、スポーツの分野において、中学校を卒業してから県外の高校に進学し、そこで活躍している選手がいます。また、芸術・文化面において、小学校で優れた能力をもっている子供が中学校以降、その能力をさらに伸ばすことが出来ていないといった状況もかなり前からあります。

一方、大学進学の見点でも、近畿2府4県で比較すると、進路志望に偏りがある、高い目標に挑戦する部分が弱いということがあります。また、工業や農業高校においても、就職面では頑張っていますが、全国の工業や農業高校に比べて、様々なコンテストや資格取得等で、ずば抜けた力を発揮する生徒が十分に育っていない面もあります。本県の地理的な特性もありますが、もう少し教育の在り方を考えていく必要があると思っています。和歌山県で頑張るんだ、県内で勉強して、しっかりと社会に出て行ける、世界に向かって出て行けるようなシステムづくりが必要だと考えています。

知事 (1)に書いている「学び、スポーツ、芸術・文化等における和歌山の子供たちの卓越した能力をさらに伸ばし」とは、高校教育そのものだと思いましたが、要するに、それぞれの分野のエリート教育ができるところを作りましようと言いたいわけですね。

清水 伸びる子や伸ばせる子、あるいは県内の教育では満足できなくて、県外に出ていく子に対して、出て行かなくても、本人が和歌山で頑張ろうと思えば頑張れるような条件整備を今まで以上にすることです。

知事 学力やスポーツ、芸術・文化など、それぞれについて実態をきちんと調べているのでしょうか。

清水 全国大会で活躍していたり、ある種目に絞った関係者から聞いた実態では、かなりの数が県外に出てしまっているスポーツ種目もあります。進学面においても、県内全ての公立高校の進路実績を分析すると、他府県に比べると非常に見劣りするといった状況があります。

知事 実績をここで出して議論すればいいと思います。データを見て、こうしないといけないなどと全部言ってしまうないと、総合教育会議で議論したことにならないのではないですか。

教育長 本日の会議は限られた時間でありますので、一つ一つのデータについて議論することが出来ないと考え、提出資料も絞っていますが、実は、県立高校から有名な難関校に入っている実績は、桐蔭高校、向陽高校に若干あるだけで、他はほとんど皆無の状態になっています。そのような状況の中で私が考えているのは、橋本高校や田辺高校など、各地域の拠点高校を活性化し、地域で優秀な子供たちが育まれる教育をしていきたいと思っています。

知事 その提案、具体的でいいですね。それは簡単で、学区制を復活させたらどうですか。

どの高校へ行っても最終は一緒だと思います。だから、自信のある教育をしてあげれば良いのではないのでしょうか。

少なくとも田辺高校や橋本高校を生き返らそうと思ったら学区制を敷くしかないのではないですか。

教育長 そうではないと思います。田辺市から和歌山市内の高校へはほとんど進学していません。

知事 田辺市から桐蔭高校へ通って難関校へ行くのではなく、田辺高校から難関校へ入れないといけないですね。

教育長 そうです。田辺高校から今以上に難関校へ行けるようになることは、意味あることだと思っています。

知事 それなら、制度的に学区制を復活した方がいいのではないのでしょうか。
 私立はともかく、県立中学校の設置や、全県一区など、地域から優れた子供が抜けていく制度を設計しておいて、一方で頑張るというのでは、出来ないのではないのでしょうか。目的に従って制度設計をするべきです。

教育長 今も、田辺高校には学力の高い子は沢山います。田辺高校でもっと学力を伸ばせるとしています。

知事 どうやって伸ばしていくのでしょうか。

教育長 先生の資質向上について、新政策でも取り組んでいきますが、そのようなことをたくさんやっていきたいと思っています。

知事 清水さんが言っている話と少し違いますね。先生の教育水準を上げていくことと制度設計とは関係ないですね。

教育長 そうではないと思います。制度設計と資質向上の両面が必要です。

知事 一生懸命やることに尽きるのであれば、そのように大きなことを言わなくてもいいのではないのでしょうか。橋本高校のような地域の拠点高校から難関校にたくさん入れていくとなると、それにふさわしいことをしないといけなくなります。一生懸命頑張って、行きたいところへ行けばいいのではないのでしょうか。

教育長 たくさん難関校へ入れれば良いという数の問題ではなく、可能性を無くしたくないということです。今の状況では厳しい状況となっていますが、無理じゃない、諦めないようにしたいと考えています。

知事 どうして無理なのでしょう。

教育長 学校自体が、難関校にたくさん入れるというような対策ができていません。教員にそのようなノウハウが十分ではないということがあります。

知事 先生が賢くないということですか。

教育長 そういうことではありません。

知事 橋本高校や田辺高校から難関校へたくさん入れようと思ったら、その手段と目的を一致させるために、教育長が「学区制復活です」というような、ものすごい提案をするのだろうと思っていました。教育長が「学区制復活」と言えば、私は、「ちょっと待ってください。混乱しますよ」と言おうと思っていました。

教育長 知事のおっしゃるように、私も学区制復活は難しいと思っています。

知事 わかりました。

それなら、何をしたいのでしょうか。きちんと分析し、その上で制度として何をしたらいいのでしょうか。学校の先生をどうやって鍛えたらいいのかということについて原案を出さないと話が出来ません。

ということで、(1)の問題についてはそういうことですが、(1)について竹山さん、御意見ありますか。

竹山委員 知事がおっしゃられたように、私たちの時代は、どの高校に行っても1人ぐらいは東大に行くという時代でした。今は、和歌山県全体で難関国公立の合格者の割合が、率で表しても近畿の中で低くなっています。それは、和歌山の子供の学力というよりも、多分テクニク的なものだと思います。和歌山県の各地方の高校3年生を持っておられる先生方が、大学受験のためのテクニクを生徒に教えているかどうかという問題であり、教師の質が悪いことではないと思っています。そこで、やるのであれば、私はテクニクを学んでいく必要があると思います。

一方で、今は18歳、大学合格がゴールだと思い、子供たちが燃え尽きているように感じます。私は、大学に入ることよりも、卒業する方が非常に難しい制度に大学が変わっていかないと、この問題は変わらないだろうと思っていますが、そこは期待もしています。難関大学に入った数字だけで議論するのはとても危険であり、難関大学を出てどのように歩んできたかが大事なことで、日本の大学も、大学に入学するよりも卒業する方がとても難しくしていかないといけないと思います。

和歌山の先生たちが決して質が悪いのではなく、入試のテクニクを学ぶ必要があります。しかし、これから、大学入試が大きく変わっていくとする時に、テクニクだけをめざしてもそれは難しく、効果的なものではないと思っています。

知事 賛成です。無理に偏差値が高い難関大学に入れても仕方ないと思っています。長い目でみると、その後の活躍とあまり関係ないことが多々あります。だから、勉強したい人が難関校に入るといいと思います。入試のテクニク等を学び、難関校にたくさん入れると思う必要がないのではないかと考えています。

教育長 生徒に、希望すればどの大学でも行けるという選択肢を広げたいのです。

知事 大学に行きたいのであれば、一生懸命勉強すればどうでしょうか。一つ問題なのは、何を言っているのかわからない先生はダメだということです。生徒に「先生の言っていることは正しい」と思わせる先生のレベルでないといけないと私は思います。そういう意味では、和歌山県の県立高校の先生はきちんとしているのではないのでしょうか。

教育長 きちんとしている先生がたくさんいます。

清水 本県の高校生には、自分自身に少し自信がもてない部分があります。例えば、本来出来るのに、あまり上のレベルをめざさなかったり、もっと上のレベルをめざせるのに、モチベーションが伴っていないなどです。ひと昔前なら、例えば、古座高校や串本高校の先輩が頑張って東大に合格したと聞けば、古座高校や串本高校で勉強して、上をめざすことが出来る、「この地域はいい地域なんだ」「この学校で勉強すればいい」と実感し、自分の在り方や生き方の意味を考えることができました。しかし、今はなんとなく無理だという感覚で、拠点の高校に生徒が集まりつつあるという状況になっています。そこで成果が上がっているといいのですが、県全体をみても、あまり成果が上がっていない状況です。教員も生徒も、自信をもたせることや自分の可能性を信じることができる教育をすることが一番大事な部分だと考えています。

知事 その通りだと思います。自信をもたないと、「俺はどうせ駄目だ」と思った瞬間に、本当に駄目になります。それを防ぐためにはどうすればいいのか考えると、受験指導をすることやエリート校を作ることとは違うと私は思います。それよりも、先生が人生の先輩として良いことを言ってくれたり、励ましてくれたりする方が大事だと思います。

ところで、難関校の教育は良いように見えますが、一部の学校はそうでもないと思います。ですから、先程話にあったテクニク的なことにこだわらなくてもいいと思います。それよりも、「こういう分野に興味があるなら、こういう勉強をしたらいいよ」「いろいろな大学があるけれど、ここに行きたいのならもう少し勉強しないとね」「この参考書で勉強すればわかりやすいよ」等、先生が生徒にアドバイスをすれば、生徒はやる気を出して、とても伸びるのではないかと思います。大事なことは、先生の道徳的資質ではないかと思います。

教育長 難関校へ行くことがいいことだという短絡的な発想ではなく、子供の可能性を伸ばしたいということです。地域の学校で、難関校へ進学できるという可能性があることをみんなが実感すれば、その地域の学校へ行くとと思います。

海南など和歌山市周辺地域から和歌山市の高校に通う子供は多いですが、田辺市から和歌山市まで通うことなどはほとんどありません。その地域、地域で、きちんとした教育が受けられる可能性をもっておきたいと考えています。

知事 全県一区の影響はありますか。

教育長 限られた地域においては、若干の影響があると思いますが、それが全てではありません。

知事 また、(1)に「スポーツ、芸術・文化…」と書かれています。この分野のエリートをどう作るかについて、これまで述べてきた難関大学合格とは全然違うことを思っています。これは本当にすばいと思っています。というのは、勉強はみんな同じように勉強しないといけないことなので、大学合格のための特別な制度を作っても仕方ないと思っています。しかし、スポーツはとてやりたい人がいます。どちらかという、ある程度の社会常識的な学力を付ければ、勉強に縛られないでスポーツばかりしてもいいと思います。同様に、芸術や文化でも言えるので、それを専門的に、養成する仕組みを作った方がいいようにも思います。

スポーツや芸術・文化に特化するためにはどうしたらいいかを考えると、別のやり方があります。これまでも県内に拠点校を作りましたが、さらにスーパー強化する方法もあります。私学や他県でお金をかけて合宿場を作ったりして、どのように強化しているのか、県内で養成するにはどこまでしないといけないのか等を調べてから、コストパフォーマンスを議論することは必要ではないでしょうか。

教育長 設備とともに優れた指導者が必要だとも思います。

知事 制度を作らないといけません。制度を作らないでソフト面だけでは、全てを上手く出来ませんね。

教育長 これまではソフト面を重視してきました。

知事 そうですね。

これからは、制度としてどうするかを決めてはいかがでしょうか。大学進学と同様で、筒香くんは横浜高校に行ってもらってよかったというのも一つの考え方ですね。伸び伸びと素質を伸ばせばいいという考え方もありますが、1校ぐらい拠点校を作り、能力を伸ばせられるようにしてもいいかと思いますが。

教育長 そうですね。様々な協議の場所で、一番の生徒がどうして県外に行ったのか分析を行った結果、学費や寮費が無料であったり、用具や遠征費など経済的な支援もしてくれる状況があったり、大学進学を約束してくれるということもあるようです。どこまでも対抗できるものではありませんが、県内で頑張ろうという子供も確実にいます。その子供を応援したいと思います。

知事 ここまでは制度として保証しますが、それ以上は保証しません。他に行きたかったら行きなさいということですね。

教育長 教育委員会ができる範囲での体制を作っていきたいと思っています。

知事 この問題について他に御意見のある方はございませんか。
それでは、(2)『個に応じた学び』が可能な高等学校のあり方』について問題提起がありました。(2)は、例えば不登校経験者や特別支援教育、いろいろな問題や悩みを抱えた子供をどうしていくかということですね。この部分について、もう少し細かく詳しく説明していただけたらと思います。

清水
教育企画監 近年、小学校等では、個に応じた教育や支援が非常にきめ細かくできるようになってきています。一方で、中学校、高校になると、どのように学ぶことがその子の成長につながるかという視点より、高校進学や就職など、進路を意識した対応が主になりがちな面もあります。

課題を抱えている中学生にとって、高校を選ぶ際、どの学校なら受かるかという視点で、夜間の定時制や小規模な分校、或いは希望者の少ない専門学科であったりと消極的な選択をしていることが多くあります。

今後、さらに人口減少が進む中、全ての子供たちが社会の担い手として活躍してもらうには、高校段階において、小学校と同様にその子に応じた適切な指導、スキル獲得、そして自立支援が必要になってくると思っています。例えば、これまで高校は、1クラス40人学級で編成していますが、課題を抱えた生徒は10人程度の少人数で、専門的な技能やスキルをもった教員が指導していくことも考えられます。また、中学校から高校に進む時には自信が持てず、特別支援学校や、今言った特別な少人数指導教室で学んでいても、途中でできるようになれば、その段階で学校種を柔軟に移れるような仕組みがあってもいいのではないかと思います。

それぞれのやる気や能力に応じて、社会に参画させていくための準備づくりをしていこうと考えています。

知事 対策が大事ですね。どこにどういう対策を講じたらいいか考えていかなければいけません。そうすると、数の制限があります。政令指定都市であれば、電車で通ったら短時間で全ての高校へ行けるという感じですが、和歌山県ではそうはいきません。どのくらいの人数がどの地域にいて、理想の教育をするためには、どこにどうやってその機能を入れるか考えていくことが必要です。

清水
教育企画監 小学校段階で、1学年あたりの課題を抱えた児童数は分かっています。特別な支援を要する児童や通級指導を受けている児童がどのように成長し、課題を克服しながら、どのような高校で学び、社会に出ているかという追跡が必要だ

と思っています。

特別支援学校は、特別支援を要するというニーズを考えて、県内各地域に設置されていますが、今後のきめ細かい指導や対応を考えると、少し足りない状態だと思っています。この場で具体的な数字は申し上げられませんが、調べることは可能です。

知事

支援が必要な子、不登校経験者等、どの地域でどのような子が何人いるということを全部調べ、その後に、このような支援をすると一番いいのではないかと等といった議論が出てきます。例えば、不登校経験者の通うモデル校を1校和歌山市に作りましただなっても、新宮に住んでいる子はどうやって通うのかを考えると難しいです。事実を基にして、教育委員会が具体的に設計していけばいいと思います。具体的な話を見てでない議論できないと私は思います。

教育長

わかりました。別の観点に話を進めます。今、本県の高校受験は0.93倍で、全国的にも非常に珍しいと言われていています。それはすごくいいと思っています。全体としては、倍率は1.0倍を下回っているので、高校に入れるようになっています。しかし、普通科と工業科、農業科の高校がある地域では、農業科で学びたいからではなく、普通科に行きたいけれど、学力面に不安があるので農業科へ行くという選択になっている場合もあります。進学校ではない高校には、中学校まで特別支援学校に通っていた子供や個に応じた学習を行っていた子供も通っています。もちろん、それぞれの学校で勉強を頑張っている子供は多くいますが、特別な支援が必要な子も何人かいて、そういう子供たちは一斉学習がしんどいです。その場合、特別支援の学びを受けさせたいという気持ちがあります。特別支援学校と高校を、行ったり来たりできるようなシステムを作りたいと思っています。

今、募集定員に余裕があることを生かして、多様で柔軟性のある教育を受けることができるシステムを整備したいと思っています。

知事

そういう実態はさらに調べ、手段を具体的に考えれば良いですね。調べた結果、どの地域にも同じように支援が必要な生徒がほほどいるのであれば、専門の人を雇い、高校に特別支援学校の機能を付け加えるといいと思います。しかし、そうではなくて高校と特別支援学校が交わっては出来ないという実態がある場合、特別支援学校に通って教育を受けるという方法もあります。やはり、実態を知る必要があります。

教育長

本日の資料として提出していないので申し訳ありませんが、知事がおっしゃられた実態の詳細は、教育委員会できかなり掘んでいます。

田中委員

福祉の現場にいた者として、(2)の「個に応じた学び」が、これからの高校に充実していつてもらえることをとても期待しているところです。

先ほどの議論で出ています「自立」ということについて、自立するために一番支えないといけないのは、社会からドロップアウトしそうな、リスクのある子たちだと思ってます。高校卒業後、大学に進学する子もありますが、すぐに社会に飛び込む子もいます。高校とは、その子の自立、つまり、この子たちがいかに社会で生きるか、いかに自分の生活を良くするかという点では、分岐点になっていると考えます。(2)について考えることは必要だと思います。

子供の中には、「どうせ」「無駄」「私は無理」と言う子供たちがいて、そういう子供たちが支援されないまましていると、社会からこぼれていってしまいます。しかし、そういう子供たちもこういう仕事をしたいという思いを持っています。福祉の仕事をしたいと思っている子供や看護師になりたいという子供もいます。また、高校を卒業後、親から離れて、自分で生活しないといけない子もたくさんいます。その子たちにも、将来の経済的なことや自立自活を考えると、高卒よりも、大卒だと思っている子がいます。こういう子供たちは、環境的・経済的な支援が不足する不安定な状態であることが多いのが現状です。1人でもその子たちを救うため、高校での支援が大事だと思っているところです。

また、個人的な観点で申し訳ありませんが、私が関わった子供たちの中には、定時制や通信制、小規模な高校でその子に応じた学校生活を送ることが出来ている子がいます。もちろん全日制の高校の先生方も頑張ってください、親身になって進路指導してもらい、無事就職できた子供がたくさんいます。ただ、今の現状として、おそらく先生方は組織としてではなく、個人的な熱意や頑張り頼るところが大きいのではと感じています。

先程、高校の数という話がありました。遠方までバスを乗り継いで高校に通わないといけないというのではなく、通える範囲の中で、子供たちが個に応じた学びが受けられる高校を作るという意味では、私も数は必要だと思います。そうすると、全日制の学校でこういう対応ができるようにならないか、組織やカリキュラムの問題も出てくるでしょうし、先生の数はもちろん、例えば教員以外の専門的な職種の方々に御協力いただくというような工夫が必要になってくると思います。そのようなことも含め、個別対応のできる高校を増やしていただけたらありがたいと思っています。

知事 田中さんみたいな、専門の人にいろいろ教えてもらってはどうでしょうか。他にございませんか。

田中 環境生活部として話をさせていただきます。(2)について、困難を抱えた子供たちを社会の担い手にするにはどうしたらいいかということだと思いますが、環境生活部では「若者総合相談窓口With You」があります。多くは、子供の将来が心配であることや不登校傾向のある子供をどうしようか、学校での友人関係や学力面で不安を持ってる子供が、学校を通じて相談に来てくれており、年間約60人います。

1点は、困難を抱えた子供については、先生だけで抱え込むのではなく、

With Youのような外部の組織も活用していく必要があるのではないかと
いうことです。

2点目は、リレー式として上の世代からだんだん下の世代へ地域の文化や祭
りなどを引き継いでいきます。文化や祭りを引き継ぐことも大事ですが、学校
の友達だけではなく、学校外の先輩後輩と関わることで、縦にも横にも広い繋
がりができます。そういう繋がりがあれば自分の悩みを解決する時に役に立て
ることができます。このようなことを考えた時、学校の規模が小さくなれば生
徒の交わる範囲が狭くなっていくと思います。それを解消するためには、例え
ば、今も部活動の中で複数校で一つのチームを作ったりしていますが、学校を
超えた部活動や課外活動などをすれば、ある程度人数が少なくなっても、それ
をカバーした人材交流、いろいろな悩み相談ができるメンバーが増えると思
います。

最後に、先ほど「個に応じた教育」ということが出ました。10年ほど前に
和歌山市内にある高校で、特別支援教育の視点を取り入れた取組が行われたと
思います。授業になかなか参加しない生徒がいて、中には計算ができなかつたり、
九九や漢字がわからなかつたりする生徒がいました。勉強がわからないと授業
が面白くないので生徒が教室で座っているはずがないということで、その学校
では、先生方が個に応じて足し算やかけ算等を教えるという取組を行うと、生
徒が変わってきて授業も真剣に受けるようになったという事例を聞きました。
今も個や能力に応じて取り組むことは先生にとって大変だと思いますが、生徒
にとっては力になっていると思いますので、その部分を強化していけば、しん
どい生徒は救われると思います。この3点です。

関守委員

現実問題といたしましては、知事がおっしゃったように数は絞っていかなけ
ればならないだろうと思います。定時制・通信制の拠点校と呼ばれている伊都
中央高校やきのくに青雲高校や南紀高校等を拠点として、生徒数が減ってきた
からこそ、また新たにできる手だてや個に応じた学びというものを模索してい
くことができるのではないかと思います。

知事

この問題について、若干懸念があります。(1)でも同じですが、例えば進学
率を上げるために、成績別にしようというような議論が当然出てきます。私立
の学校では、このようなことに取り組んでいる学校はたくさんあります。それ
は生産性が良いということになります。その反面、先程竹山さんが言われたよ
うに、自信喪失感を多くの子供に植え付ける可能性があると思います。つま
り、A選抜をした子とA選抜に漏れた子がいる場合、A選抜に入っている子
供は良いですが、A選抜に漏れた子はあまり賢くないというように、同じ高校
に入っているのに、そのように分けていいのかと思ってしまいます。理科系と
文科系に分けるのであれば、別にいいと思いますが。

同じように考えると、進学校の中に特別支援学級があるのはいいと思います。
作った場合、弊害をどうみていくかを考えていかないといけません。

教育長 その通りだと思います。いわゆるエンカレッジスクールというよう学校がありまして、エンカレッジスクールと名前がある方がいいと思って通う子供と、エンカレッジスクールと言う名前だから嫌だという子供と両極端に分かれると思います。ただ、そこはいろいろ話をしながら、その子にとって一番いい方法をとっていくのがいいということ、保護者と話をしながら進めていくという状況です。

知事 それは制度設計した後の進路指導としてということですね。しかし、制度を設計する時には大多数の人に適用するような制度を作らないといけません。制度設計の論理として、或いは考慮事項として、そういうことも考えないといけないことを申し上げました。エンカレッジスクールと通うか、エンカレッジスクールは嫌だと思って別の所へ行くかは本人の問題だということですね。

教育長 両方受けられるような制度にしていきたいと考えています。

知事 両方を受けられる場合、特別な方をどう設計するかをいろいろ考えておかないといけませんねという話をしました。

 それでは、(3)の「県内各地域の状況に応じた高等学校の在り方」について説明をお願いします。

教育長 先ほどから議論しましたが、地域の子供をきちんと育てていこうという考えです。

知事 具体的な考えはあるのでしょうか。

清水
教育企画監 これから、地域からの人口流出に拍車がかかり、和歌山市とその周辺域などに、流入が進むのではないかと懸念しています。県内各地域は、同じように人口減少が進むわけではありません。上富田町から新宮市までの間で、高校教育を受けられる学び舎は限定されていますが、地域の特徴やあり方を予測しつつ、何年後頃にどのように整備していくことがその地域の人の願いにもかなうだろうか。或いは、県全体の発展に繋がるかという観点で設計図を作っていくことになると思います。

 和歌山市では、かなり以前、普通科高校は桐蔭高校、向陽高校、星林高校だけで、和歌山工業高校や和歌山商業高校がありました。和歌山市の人口も大きく減少するなか、現存の他の学校を含め、どのような使命を持って、整備されていくのかが必要となります。また、工業高校は県内に3校ありますが、本県全体の工業人材養成という観点で、どれぐらいの人数が必要か、それをどう配分していくのか等といったことになると思います。

知事

一番考えなければいけないのは、量の問題だと思います。和歌山市だけを考えると、人口減少しても特色のある学校を作るとはあまり難しいことではありません。しかし、清水教育企画監が言われたように、串本地域の子供たちをどうするのかを考えたときに、全ての串本地域の子供たちを串本の高校に通うようにするかどうか。そのような地域がたくさんありますね。

はるか昔々、我が学友の元企画部長は、多分、和歌山市内に下宿しながら、学区が自由な地域から進学して桐蔭高校へ通っていました。このように、下宿を探して高校へ通うことはちょっと気の毒だから、寮を整備することも必要な。ある地域では高校は維持できないのなら、こことここは閉じて、こっちの高校へということがあったらいいんじゃないかと思います。もう一つの問題としては、(1)や(2)で言ったような話で、芸術学科やスポーツ学科を作るとしても、全県一区でも1つしか作れません。例えば北高のサッカー部をすごく強くしようとして、サッカー部は北高にしか作りませんとすると、サッカーをやりたい新宮の子供はどうするのか考えないといけません。近大新宮が強いからそれでいいのではないかという議論は出てくるかもしれません。そのようなことを1つ1つ考えていくと、地域的なハンディキャップをどう解消していくかを結構考えないといけません。

また、各校に特別支援学校的な機能を作っていくやり方もあるかもしれませんが、この制度が少し無理だとすれば、別のカリキュラムを組み、大学を受けさせてあげるといった制度を作ってもいいかもしれません。これは、ものすごくお金が必要になるかもしれません。

和歌山県は地方県であり、和歌山の中の地方になるととても人数が少なくなるので、そういう所に住んでいる子供たちが、ハンディキャップを負わないようにどうやって支えていくといいのだろうということを考えて、制度設計をして欲しいと思います。

教育長

そこは悩むところで、古座校舎をなくしてしまったので、「古座高校がなくなってやっぱり寂しくなりましたね」ということをよく言われます。また、地域の子供の数が減っていったら、串本古座高校の学級数が減っていくかもしれないですが、そういう状況でも、串本や古座の地域のことを考えると、串本古座高校を残したいと思っています。遠くの地域から通ってくるのではなく、串本古座高校に一番近い地域の子供たちに通ってもらって、きちんとした教育が受けられるようにしたいと思っています。

例えば、今、私学の近大附属新宮高校に多くの生徒が通っている状況があり、それは仕方ないことですが、遠い高校へ行くよりも、近くで十分な教育が受けられる学校にしたいと思っています。

竹山委員

私は、串本古座高校は地元の子も行ける学校であるべきで、桐蔭や向陽への志望を取りやめてでも行きたいという学校、魅力ある学校になってほしいと思

っています。バカロレアを入れようなどとまでは言いませんが、高校にかなり特色をもたせていくことは出来ないことではないと思います。

秋田の県立大学のように、全国から進学して、就職率100%で非常に特色のある大学が作れるのであれば、高校でも、そのぐらい特色を持たせることができるのではないのでしょうか。ただ、地元の子が行ける枠を残しながら、絶対、桐蔭や向陽へ行くよりいいよというぐらいの特色を持った高校を作らなかつたら、残っていかないと思います。

清水
教育企画監

それぞれの方の言われる通りなのですが、串本地域にも、今後も子供はいます。その中には、寮や下宿をして地域を出てしまう子供もいるかもしれません。串本地域の全ての子供が串本古座高校に行くことを前提とした学校作りではなく、多様性がある中で、地域の子供が必ずしも全員進学しなくても成り立つ、残せる学校とはどういった高校なのかといった観点が大事になってくるだろうと思っています。今後、遠隔地の高校教育を考えるうえで、大きな要因となるのが企業が経営する広域通信制高校です。いわゆる田舎や離島に住んでいる高校生に焦点を当てようとしています。過疎化が進んでいる地域の子供たちの教育環境、特に進学のための教育環境が整備できないと、通信制が有力な選択肢となっているようです。教育とは、知識の伝承や、その効率性だけでいいのでしょうか。この問題は今後、教育とは何かということを考える上で大きな問題になってくると考えます。地域における高校を存続させる方策について、地域と一緒に考えていくべきと思っています。

知事

それでは(4)の内容に移ります。この(4)の考え方について、私は、少し教育者、行政機関といった大人が、余計なお世話をしていると感じています。

例えば、科学技術が大事だと思ったらスーパーサイエンス学科や理数科を作ったりしますね。作った後、理数科と聞くとよくわからないが、格好いいように思い、頭の良い子が集まってくるが、本当に理数科に行きたい子が集まっているかといえば実はそうでもないことがよくあります。例えば、名前をあげると語弊がありますが、粉河高校の理数科に優秀な子が多くいます。某東京事務所長がそうで、彼は粉河高校の理数科から農業経済をやりたいだったので京都大学農学部に入ったそうです。粉河高校の理数科の中でも半分ぐらいの生徒は、高校の途中で文科系の学部を志望しているため、数Ⅲを学習せず、受験に必要な社会を教えている等ということがあったそうです。また、昔、大変立派な数学の先生が、「田舎の子はみんな理科系に行った方がいいぞ」と言われました。その先生は生徒に尊敬されていたので、特に男子が理科系のクラスを選択してしまい、文科系のクラスは女性ばかりになってしまいました。そういう中で私は育ったわけです。

このように、理科系に進んでいる子供をみても、本当に理科系ということではなく、周りの生徒の学力が高いから理科系を選択したという子供も結構いますね。だから、この分野はこの学科と決めつけしないで、交友や道徳心、社

会性等を身に付けながら、基本的な学力をきちんと身に付けて、行きたい大学があったら必死になって勉強したらいいのではないかと思います。今、こういう分野が伸びているから専門学科を作るといことを言わない方がいいのではないのでしょうか。

教育長 専門学科は作ろうということは思っていません。桐蔭高校の数理科学科がなくなりましてし、知事の言っている方向で進んでいると思っています。

知事 一生懸命教育を考えると、余計なお世話で言うてしまうことが多いですね。例えば文部科学省の民間英語試験採用なんていうのは、私は余計なお世話だと思います。なぜかという、文部科学省が大学選抜の部分まで関与せず、大学に任せておけばいいと思います。例えば、ある大学がどこかの試験を受けてほしいと言えればそれでもいいし、大学の先生が採点するのであれば、筆記試験を行えばいいと思います。筆記問題は絶対必要だし、ヒアリングやリスニング、スピーキング等そのようなことは必要ですが、何もそれを全国どこでも通用するような制度として全部文部科学省が作らなくてもいいのではないのかと思っています。それは大学に任せておけばいいので、大学全体が役に立つような共通試験だけを国が作って提供すればいいと思っています。そのようなことを言っている人は1人もいませんが、私はそうと思っています。

そういう意味で、我々は今、教育行政の話をしているわけですが、これからの社会がこうなるからといって、あまり学科等に手を加えることはやめにした方がいいのではないのかと私は思います。先程のスポーツや文化・芸術に特化した時の話と逆のことを言っていますが。

教育長 受験に特化したような専門学科は必要でないと思います。一方、総合学科は今のところ必要だと思っています。

知事 総合学科とは何でしょうか。

教育長 総合学科というのは、普通教育や専門教育の中から、生徒の選択によって、色々なことが学べる学科です。農業を中心に学ぶ子がいれば、工業系のことを学ぶ子がいたり商業系のことを学ぶ子もいます。例えば40人クラスが4クラスあるとしても、選択科目がたくさんあるので、10人ずつのクラスで授業を行ったりしています。総合学科の子供たちは、自分のことを考えながら、就職のことを考えたり、進学を考えたり、これをやっておけばいい等といったことも考えながら、履修する科目を選ぶのにすごく時間をかけています。自分で考えて学習するという結構面白い学科だと思っています。県内では、熊野高校と和歌山高校、新翔高校、有田中央高校の4校があります。

その他はほとんどが普通科です。今、商業科のみ的高校が少なくなってきており、神島高校も今、普通科が併設されています。以前御坊商工だった紀央館

高校も今は普通科があります。普通科志向が強いので、どうしても普通科になってきます。そのような状況なので、工業科や農業科、商業科と同様に、総合学科高校は出来るだけ残していきたいと思っています。

知事 それでは、なぜこの(4)を問題意識として挙げているのでしょうか。

教育長 先程竹山委員からも話が出ましたが、今、バカロレア等も視野に入れてみたらどうかと思い、提案をしています。

例えば、先程の話ですけれども、串本古座高校でグローバルコースがあり、全国募集をしています。串本古座の地域はこれからロケットが飛ぶ地域でもあり、海洋のマリンスポーツとしても盛んな地域ですので、そういうことも取り入れながら学習を行っていくという方法を取っています。地域に根ざした学習を取り入れていってもいいのではないかという細かい話も出来るのではないのでしょうか。学科を作るという話だけではなく、地域に根ざした学習という観点でも、いろいろな方が意見を言ってくださるだろうと思っています。この前開催しました「きのくに教育審議会」においても、「普通科だけでいいだろう」「工業科は意味がない」「高校で工業の勉強をやってきても全然力がついていない」といった厳しい御意見もあつたりしました。そういうことを議論していただくためにこの項目を挙げています。

知事 最後の「工業の勉強をやってきても全然力がついていない」という点はどうなんですか。

教育長 そうではありません。

確かに工業に関しては、大学生と比べると専門的な知識が弱い面もありますが、企業での活躍具合をみていると、遜色はないと思います。自信をもって教育をしていますので大丈夫です。

知事 次に、(5)中学校と高等学校の接続の在り方です。

森田委員 中学校と高等学校の接続の在り方として、子供たちが高校を選択するときに、「こういうことをやりたいからこの高校に行きたい」という子供たちの意識を大事にしたいと考えています。この点数だからこの高校という、消極的な選択で高校に行くのではなく、私はこれをしたいからこの高校に行きたいというような、中学校と高等学校の接続の仕方ができることが理想的だと思います。

沼井委員 重複するかもしれませんが、最近まで高校生の子がいました。中学校での進路として、高校を選択するときに、スポーツをしたい、一部の進学校に行きたいという子供は別にして、大体は、その中学の担任の先生との面談で、「君の学力だったらこれぐらいなのでこの高校だろう」というように、中学校の成

績で選択し、一次の願書を出す。定員が少しオーバーしていると、ボーダーラインの子がまたそこで進路を変えたりするという進路選択の仕方が多いです。この高校に行きたいという選択ではなく、自分の成績から高校を選択しています。

特色ある高校といとなかなか難しいと思いますが、これがしたいからこの高校に行きたいという意識を少しずつもつようにしないといけないと思います。

知事

2人の話から大事なことが2つありました。1つは特色のある高校はあるのかということです。それは他の領域の問題とも絡んでおり、教育長が言っておられたような特色のある学校をつくっていかないといけない。特色のある学校があると、そういうところに行きたいということになります。

もう1つは、選び方として点数だけでいいのかという議論があります。例えば県庁で言えば、明らかに違います。向き不向きがあるので、学科の点数で選ばれるはずがないのです。では、県庁はどうしているかということ、学科点も必要で、基本的な教養や計算能力等は、やはりきちんとしていないと困るので、配点では3分の1ぐらいにしています。その他の3分の2ぐらいは何してるかということ、面接しています。面接で志望等の受け答えや性格、向き不向きとかを結構丁寧に選んでいます。

そこで、高校入試で面接をすることが是か非かということが大変大事になってくると思います。こういうことも含めて、いかがですか。

教育長

今の状況であれば、大学入試を変えないと高校は変わりませんという話と同様で、おそらく高校入試を変えないと中学校も変わらないと思います。高校入試で、中学校の成績だけでなく、「日頃、中学校でこういうことに一生懸命に取り組んでいたので、この子はこっちの分野を見ているんだよね」等といった中学校と高校の繋がり方を含んでいるのが、この項目だと私は考えています。

知事

高校入試で面接は重要だと思いますが。

清水
教育企画監

面接は非常に重要な手段だと思います。しかし、現実的に考えると、面接を導入すると中学校の先生が一生懸命に面接の練習をするようになります。内面をアピールするには至らないように思いますので、面接を導入することは、労多くして効少なしだと思います。

知事

今、子供たちの視点で、受験指導の話をされましたが、受験指導を見破られるかどうかという面接官の能力の問題もあります。受験指導にだまされる場合も結構あります。入試の予備校があり、予備校では入試の面接をクリアするために、こんな答え方をしなければいけないと懇切丁寧に教えてくれます。懇切丁寧に言われたら、わりときれい事を言うんです。仮に、きれい事の好きな方

が面接官だったらだまされます。心にもないことを言っていてだまされてしまいます。面接官にはそういうのを見破る器量と度量がいるんですが、そういう能力を面接官はもっているかという議論もあります。もっと難しいのは、子供相手にこのような面接をクリアするための指導をしてもいいのかという議論があります。

そうすると、先程、お2人が言われたようなやり方はどのようにしたら叶えられるのだろうかということを真摯に考えないといけません。面接を導入することが難しいのであれば、別の形で何かあるかもしれません。

教育長 学力だけでなく、日頃の中学での行いといった全てのことが反映できると一番いいと思っています。

知事 具体的な方法で思いつくのは、先生が推薦状でたくさん書く方法です。つまり、この子はこういうような子供で、こういうことを特に志望していて等、先生が応援演説をどのぐらいしてあげるかということです。そうすると、先生はその子供をただ成績いいとか悪いだけでなく、熱心に子供を見ます。そのようなものを書くと、高校の先生がそれを読んで、「この子はこの点はちょっと低いけれど、これはこういう点で優れているんだな」とわかります。例えば、理科の成績は悪いけど、フィールドワークがとても好きで、頑張っているよ等といった評価をしてあげることができるというのは、ありうるかもしれないと思います。

あとは、中学生から選ばれるような特色を高校はどう出すかです。

田嶋企画部長 私立は公立学校とは違い、学校の特色を非常に出しやすい環境にあります。難関大学をめざすという高校に特化してもいいし、スポーツで日本一をめざす高校に特化してもいいという状況にありますので、県立高校とは少し悩みの部分が違うと思っています。

ところで、一番初めに議論のあった、難関大学への進学者率が他の県に比べて低いというお話がありましたが、それは県立だけの進学率なのか、私立も含めた進学率なのか教えてください。

教育長 私立も含めた進学率においても、進学率が低い現状と言えます。

田嶋企画部長 難関大学に入ることが教育レベルが高いと言っているのかという問題はありますが、全体的に公立私立の両方合わせて他の県よりも教育レベルが低いと言うことですね。

知事がおっしゃっていたように、他の県へ行ってでも難関大学に入りたいという子はそれでいいでしょうが、県内で勉強して難関大学に入りたいと思っている子供たちが、その能力を十分に発揮できるだけの教育になっていないという問題意識であれば、そういうふうを高めていくためのシステムづくりをやっ

ていただきたいと思っています。

知事

抽象的すぎますね。

ここでもう1つ申し上げたいことがあります。何かといいますと、中学校の在り方というのも、大問題なのではないかということです。今、高校の議論を行っていますが、(5)の話は中学校から高校への接続の話で、入試をどうするのかということですね。これは、高校からみた中学校ですが、中学校自体の問題が実は一番問題ではないかと私は思っています。昔に比べると和歌山県はどちらかという成績のいい私立中学校、私立高校がたくさんできました。さらに桐蔭中学校と向陽中学校を作りました。竹山さんが先程言われたように、私立中学校や県立中学校に抜かれた方は、自尊の気持ちをもって自分を高めることが本当にできるかと思うわけです。公立の中学校で一生懸命勉強すると、「最後はうまいこといくよ」ということを保証してあげる、或いは説得してあげる、信用できるようにしてあげるということが、とても大事ではないかと思えます。

清水
教育企画監

そのために、(1)(4)の観点があると思っています。(5)の観点は、中学校の教育や中学校の先生のモチベーション等に関係する部分だと思っています。

今、私立中学校や県立中学校がありますが、高校から入ってくる生徒は、負けん気をもって頑張っている子もあれば、私立中学校や県立中学校に行くことをよしとしない子もいるわけです。そこはどうしているかという、中学校の先生方の教育に関する情熱や意地といったものがあると思います。それに応えるためには、中学校から入ってこないという高校にしないためにも、今回の高校再編が一つの柱であると思っています。中学校の先生方や中学生が頑張ってくれば、中学校、高等学校をひっくるめて、和歌山県の教育が発展すると思います。

知事

具体的に言うと、例えば西和中学校みたいな公立の中学校の子供たちを勇気づけるために、高校の教育を工夫すると言われましたね。それは具体的にどうすることでしょうか。

清水
教育企画監

公立の中学校から高校に進学してきた子供たちが高校でしっかり頑張っている中、自分たちが公立の中学校で勉強してきたことを誇りに思い、高等学校でも能力を開花できます。これはスポーツでも、勉強でもそうですが、そういう高校をきちんと整備していくことが大事だと思います。私立も中学校高校とエスカレーター式でないと駄目だ、或いは県立中学校はエリートだというようにしないためには、中学校と高等学校のより良い関係、つまり切磋琢磨する関係を作ることが大事だと思います。

知事

もう少し具体的に言うと、例えば桐蔭高校からたくさん難関校に入ります。桐蔭中学から桐蔭高校への進学者は少しの人数しかいないから、残りの子供た

ちもとても頑張っていて、公立中学校から公立高校へ行くコースはいいよと思っ
てもらえたらいいということですね。

清水
教育企画監

現実、桐蔭中学校から入ってくる生徒は80名いますが、非常によく頑張っ
ており、能力の高い子供もいます。市内の中学校から桐蔭高校に進学して、桐
蔭中学校から入っている生徒と同じように学んでいます。県立中学校と市町村
立中学校では違いもありますが、今後、どのように自分は生きていくべきか、
どのように自信を付けていくべきか等、それぞれが互いに切磋琢磨することが
うまくできていると思います。

知事

それは高校教育の問題ですね。

私が言っているのは、中学生を失望させないようにするにはどうしたらいい
かということです。

清水
教育企画監

公立の中学生にも、多様な魅力ある、そして頑張れる高校を作ってあげるこ
とだと思えます。中学校の時に、私立等に行かなければ大学の進学ができない
というようなことをしないことが大事です。

知事

具体的にいうと桐蔭高校からたくさんの人数が難関校に入ります。桐蔭中学
校の生徒は少ないので、公立の中学校から進学した生徒が多い中で難関校に入
っています。だから、別に落ちこぼれているわけではなく、今から頑張ったら
桐蔭高校を経由して難関校へ行けるので、全然自信なくすことないぞと言って、
先生が頑張ればいいので、桐蔭高校をものすごくいい学校にすればいいとい
うことでしょうか。

清水
教育企画監

そういうことだと思えます

北高や和歌山工業高校もそうですが、県内の高校へ行って可能性がある、
将来を見通すことができることが中学校の子供たちのためになると思います。

知事

それは田辺高校と橋本高校を地域の進学校にするんだという動機の一つです
ね。

教育長

動機の一つです。

知事

今までの観点以外にも話をしたいことがあるのではないのでしょうか。高校教
育に関して、皆さん述べてください。

竹山委員

普通科も含めて、私も、知事がおっしゃったように、特色をつけないとい
うことに関して、教育再生会議の座長さんだった方が、「子供の教育で一番必
要なのは何か、好奇心なのか」と聞かれたときに、「なぜだろうと思うことだ」

と言われたんです。小さい頃から「なぜだろう」と、まず不思議に思わないと問題解決には繋がらないと言われたことが私は印象深く感じました。専門学校はまた別ですが、小さい頃から「これは何」「なぜだろう」という子供の観点に丁寧に向き合うことが大事だと考えると、あまり高校ぐらいまでに小手先で色々なことをするよりも、課題はいっぱい出てくるだろうから、「なぜだろう」と思い、自分で解決していく力をつけることが一番大事だと思っています。

沼井委員

教育委員は年間に県立高校に訪問させていただきます。その中で、今年度はこれまで、新宮高校と新翔高校へ行かさせていただきました。その地方の高校教育の在り方として新翔高校に訪問したときに、新宮高校に行けない子供がどちらかと言うと新翔高校にたくさん入ってくるとお聞きしました。

新翔高校は先ほど教育長が言われていた総合学科です。新翔高校で学び、さらに介護の勉強をする子や看護系の専門学校に行って地元の病院に就職する生徒もいるそうです。こういうことが、その地方の高校教育の在り方の一つだろうと思っています。また、かつて和歌山高校にも行かせていただきました。和歌山高校も総合学科であり、芸術の分野で特色があり、日高地方や下津の方からなど、県内で少し遠方から生徒が通っていると言われていました。先程からの議論の中で、普通科では少し特色が出しにくいという話がありましたが、地方によれば、総合学科が特色になると思いました。和歌山市は多くの高校があるのでいいのですが、地方のモデルとして総合学科ということもあると思いました。

関守委員

総論的なことになってしまいますが、我々県民からすると、これから人口が激減して子供たちが少なくなると、寂しい、これから失速していくんだという思いがやっぱり頭をよぎるわけです。そのような中で知恵を絞りまして、ピンチをチャンスに変えるような本県の高校教育改革であればいいと思いますし、全ての人が大学入学をめざさなくても、自己肯定感のある、人間性豊かな子供たちが育つことがいいと思います。この人口減少がきっかけとなるならば、それはそれでいいのではないかと、前向きに考えていきたいと思っています。

森田委員

私は高校と地域の繋がりについて少しお話をさせていただきます。

コミュニティ・スクールの取り組みが、全ての県立学校で行われるようになり、地域のあちこちで高校生との繋がりを感じる機会が増えたように実感します。

例えば、地域のイベントに高校生が参加してくれたり、小学校や幼稚園等で学生が読み聞かせをしたり、小学校のサマースクールで出前講座をしてくれたりという取組により、地域で高校生に会ったという声がよく聞かれるようになりました。

それは小学生の子供たちにとってお手本にもなりますし、高校生の子供たちが小学生と触れ合うことで、どのようにすると伝わるのかを考えるとと思います。

それはとてもいいことだと思いますし、高校生と地域の繋がりは、防災の点からいいましても、避難所の運営等高校生の活躍についてよく耳にします。今後も、高校生と地域の繋がりが重要視される中で、今以上にコミュニティ・スクールの取組の充実を期待したいところです。

田中委員

今日は本県の高校教育について協議を行いました。私は、子供たちのことについて考える時は、小学校や中学校、高校、大学といった輪切りではなく、幼稚園から大学までトータルで教育問題を論じる方がいいと思っています。先程、中学校と高校の接続という話もありました。中学校から高校だけの接続よりも、もっと広い流れのようなイメージをしています。先程もお話がありましたが、中学校から高校への連絡へと普通流れていくと思いますが、逆方向というような、例えば高校から振り返って中学校の時はどうだったか、小学校の時はどうだったか等といった、行き来可能な見方があっていいのではないかと思います。

知事

私から少し追加で一言言わせていただきます。少し違うかもしれませんが、森田さんの話を聞いていて、なるほどと思いました。今、高校教育の中で、高校生が教える立場になることはあるのかなと思いました。高校生が小学生に教えるに行くと、いつもは教えられるばかりという受け身の姿勢だから、先生の苦勞はわかりません。先生に言われてうるさいなと言う気分です。いつも接してるかもしれませんが、教える立場になってみると、意外と大変なことがわかります。また、自分が教えたり指導したりすることで、上手くいくと自信に繋がるし、きれい事でも言ってしまったら、自分がそれに反するようなことをしてしまうと、余りにも恥ずかしいから、気を付けますね。だから、高校生が教える立場に立つことも時には必要だと思いました。

ということで、今日はフリーディスカッションとなりました。今後、実態はこうで、こういう風にしたらどうでしょうかという教育委員会の原案をたくさん出していただけたら、議論しやすいのではないかと思いますので、よろしくをお願いします。

事務局

それではこれもちまして、総合教育会議を閉会いたします。
御出席どうもありがとうございました。